

藤裏葉巻「残り給はむ末の世などの

たとしへなき衰へなどをさへ思ひはばからるれば」攷

上野辰義

〔抄録〕

源氏物語藤裏葉巻は、第一部の掉尾を飾る巻として、諸案件の解決が語られ、物語に大団円をもたらすが、同時に若菜上巻以後の光源氏晩年の物語を準備する巻としての位相をもあわせ持つ。それを、この巻で吐露される物語の主人公光源氏の人生認識の中心に見出すことができる。その解明の糸口として、従来十分に解釈されていない、賀茂祭の日における光源氏の発言を主

にとりあげて、彼の「心おごり」がもつ問題を考える。それは、光源氏一族の今後の安泰と繁栄を左右する、抑えようとして抑えることの困難な、獅子身中の虫であった。

キーワード 源氏物語 藤裏葉巻 光源氏 心おごり 出家道心

一、藤裏葉巻における光源氏の人生認識

源氏物語藤裏葉巻は、少女巻以来懸案だった、光源氏の息夕霧の雲居雁との結婚、光源氏の息女明石姫の東宮入内、姫の義母紫上と実母明石御方の対面融和、光源氏の准太上天皇待遇獲得と、夕霧の中納言昇進、六条院への冷泉帝・朱雀上皇の同行みゆき、というように、光源氏一族の栄華と繁栄が語られ、桐壺巻における高麗人の相人の予言

の最終的な実現と貴種流離譚に枠どられた源氏物語第一部の掉尾を大団円で飾る巻として、まことに相応しい内容を持つ。したがって、そうした状況において光源氏が、

①大臣（光源氏）も、長からずのみおぼさるる御世のこなたにとおぼしつる（明石姫の）御参り、かひあるさまに見たてまつりなし給て、心からなれど、世に浮きたるやうにて見苦しかりつる宰相の君（夕霧）も、思ひなくめやすきさまに静まり給ひぬれば、御

心落ちるはて給ひて、今は本意も遂げなん、とおぼしなる。対の上（紫上）の御有様の見捨てがたきにも、（秋好）中宮おはしませば、愚かならぬ御心寄せ也。此御方（明石姫）にも、世に知られたる親さまには、まづ思ひきこえ給ふべければ、さりとともとおぼしゆづりけり。夏の御方（花散里）の、時にはなやぎ給ふまじきも、宰相の物し給へば、とみなとりどりにうしろめたからずおぼしなり行く。^①（二〇一二）

と、子どもたちや妻たちの将来に不安がなくなつたと見て、年来の出家の願いを実現しようと思うようになったのも自然の成り行きといえる。このことは、語り手の推量も入らない光源氏の心中として、信用できるものといえよう。

しかし、藤裏葉巻には、他にも、この時期の光源氏の人生認識を示すと見られる詞が、二例見られる。夕霧と紫上に対する発話の中にある。夕霧に対するものは、雲居雁と結婚した翌朝の夕霧を前にしたもので、

②今朝はいかに。文などものしつや。さかしき人も、女の筋には乱るる例あるを、人わろくかかづらひ、心いられせで過ぐされたるなん、少し人に抜けたりける御心とおぼえける。大臣（内大臣）の御掟てのあまりすくみて、なごりなくづぼれ給ひぬるを、世人も言ひ出る事あらむや。さりととも、我がかたたけう思ひ顔に、心おごりして、すぎずきしき心ばへなど漏らし給ふな。さこそおいらかに大きな心掟てと見ゆれど、下の心ばへををしからず癖ありて、人見えにくきところつき給へる人なり。（二〇〇五）

と、夕霧が内大臣によつて雲居雁と引き離されても冷静に対処して本意を遂げたのを褒め、折れて出た内大臣に得意顔に、心おごりして、浮気的气配など見せるな、と言っている。これは、前巻梅枝で、いまだ独り身でいる夕霧を前に行った光源氏の訓戒と呼応している。そこで、光源氏は、自分を律して、つまらぬ結婚をせず、身をもちくずすな、思いどおりの結婚は困難なものだが、かといって好き心をつかうな、若い時期に気を許して気ままな行動をするな、得意になつて心奢りして、女のことでは失敗するな（「心おのづからおごりぬれば、思ひしづむべきくさはひなき時、女のことにてなむ、かしこき人、昔も乱るる例ありける」八九九〇）、身を落ち着けて女の恨みを買わず、女への不満をこらえよ、という。要は、好き心を使わず、心驕りせず、身を落ち着けて女の欠点も大目に見よ、ということだろう。これはさらに、光源氏自身が言うように、彼の父の桐壺帝から、六条御息所に関して葵巻で受けた訓戒、「心のすさびにまかせて、かくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきこと也。∴。人のため恥ぢがましき事なく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ」（二八四）、また、葵上に関して紅葉賀巻で思惟された父院の推量「さるは、すぎずきしううち乱れて、この見ゆる女房にまれ、又こなたかなたの人々など、なべてならずなども見え聞こえざめるを、いかなるものの際に隠れありきて、かく人にも恨みらるらむ」（二五三）の要点、好きわざをせず、女の恨みを買うなという内容と、つながるものなのだが、違うのは、光源氏から夕霧になされる訓戒にはいずれも、「心おごり」「心おのづからおごり」ということを戒めている点である。

これは、この時期の光源氏の認識として注意されるべきであろう。また、もう一例は、暁に紫上がみあれに詣でた後、賀茂祭の棧敷で、紫上に語った詞である。

③大臣（光源氏）は、中宮の御母御息所の車おしきげられたまへりしをりのこと、おぼしいでて、「時に寄る心おごりして、さやうなることなん、なまげなき事なりける。こよなく思ひ消ちたりし人（葵上）も、嘆き負ふやうにて亡くなりなき」と、そのほどはの給ひ消ちて、「残りとまれる人の、中将はかくただ人にて、わづかになりのおぼるめり。宮はならびなき筋にておはするも、思へばいとこそあはれなれ。すべていとさだめなき世なればこそ、なに事も思ふままにて、生ける限りの世を過ぐさまほしけれど、残りたまはむ末の世などの、たとしへなき衰へなどをさへ、思ひはばからるれば」とうち語らひ給ひて、上達部なども御棧敷に参りつどひ給へれば、そなたにいで給ぬ。（一〇〇八）

光源氏は賀茂の祭のこの日、かつての葵上と六条御息所の間起こった御禊の日の車争いを思い出し、「こよなく思ひ消ちた」葵上の子の夕霧が、臣下で宰相の中將にとどまっているのに対して、「こよなく思ひ消」たれた六条御息所の娘の秋好むが、中宮となっていることから、無常の世を思いのままに生きている間すこしいけれど、紫上が残るであろう私の死後、この上ない零落などまで、避けるべく心配されるので」という。ここでも葵上のその当時の「心おごり」が二人の女性の子もたちの現在の地位を逆転させている原因だ、といっているかのようであるのが注意される。が、それはさておき、この光源氏

の紫上に対する自戒とも、訓戒とも思われる発言の意味は、明らかなのだろうか。

まず、本文に問題がある。下線部における主要なものに限っても、「思ふまま」は、『源氏物語大成校異篇』の底本大島本のみ「思ふさま」とあるので他の諸本により訂したが、「思はばからるれば」は、青表紙諸本と河内本のほとんどがこの形であるものの、河内本の大島本が自発表現のない「思はかり侍れば」、別本の國冬本が「ば」のない「思はからるれ」とほぼ同形、別本の麥生本が「思ひ」のない「はからるれば」、別本の阿里莫本がさらに「ら」の落ちたかと思われる「はかるれば」、と多様であるうえ、別本の陽明本には「おもひはからるれば」、同じく保坂本には「思ひはからるれ」の異同がある。

また、下線部の意味も、吉沢義則の『対校源氏物語新釈』以来現代諸注は、「思ふままにて」を『新日本古典文学大系』本が「思ふさまにて」とする以外は、「思ふままにて…おもひはばからるれば」の本文を立て、例えば、「万事、何がどうなるとも定まらぬ世の中ですから、何事も自分のしたいようにして、生きていかざりこの世を過したいものですが、あとに残られるあなたが、晩年などともんでもない落ちぶれようをなさりはせぬかと、そんなことまでがつい心配されるものですか」（『新編日本古典文学全集』本）と、口語訳するのが普通で、『新潮日本古典集成』が、「あとに残られるあなたなどの晩年の見る影もない落ちぶれようなど、までが気になりますので」と、紫上以外の対象も含まれているのが、異なるくらいである。

しかし、葵上と夕霧、六条御息所と秋好中宮の關係が親子であるのに、光源氏と紫上は養父と養女の關係ともかつては言えたが、今は夫婦であり、現世での盛衰の変化の現れ方として同一ではない。親子間の変転を、夫婦間のそれに読み替えてよいのか疑問が残る。

実際、古注を見ると、『万水一露』（『源氏物語古注集成26』）に「碩紫上のゆくすゑまでをおほしやる也これは紫上の源にをくれて残給はん時のこと也さそ其時はたとへもなくおとろへ給はんと今よりは、かかるゝと也」として引かれる宗碩の説が、現代の諸注と一致するものの、他は、『内閣文庫本細流抄』（『源氏物語古注集成7』）に「たいのうへみあれに」の注に、「紫上也此時分紫上の栄花の盛也若菜の巻よりは思ふ事のある也」と紫上の転落に言及する説がみえて注意されるくらいで、多くは、『一葉抄』（『源氏物語古注集成9』）が「なにことも思ふまゝにていける世のかきりの世を」に、「父祖善悪ハ子孫にむくふ理也當時の御さかへにつけても行末のおとろへをおもひの給事也」、「孟津抄」（『源氏物語古注集成5』）が、「すゑのよなどのたとしへなき」に、「子孫なともしらぬとのこゝろ也」、「岷江入楚」（『国文学註釈叢書』九）が、「すべていとさだめなき世なればこそ、何事も思ふまゝにて、いけるかきりの世をすぐさまほしけれど、のこり給はん末の世のたとしへなきおとろへなどをさへ、思ひはばからるればと、うちかたらひ給て」に、「此段の心は、前に、御息所と、葵上との事をの給ふて、扱、世間は定めなき物ぞと也。仍、只今源氏の心のまゝに、栄花をも尽したく思へども、行末に残り給はん子孫の事、外におとろへ給ふ事などあらば、俄にけぢめあらはなるべし。扱わが徳をも

おごらずして、子孫にのこしたく思ふ故に、心のまゝに、栄耀をばつくさぬよしを、紫上へかたり給ふ詞とみえたり。」、「湖月抄」（延宝元年跋版本）も、同一文に、「愚案彼御息所葵上の御末のありさまを見給ふにつけても其盛衰定めなき世なれば源氏も只今御心のまゝなる世にせまほしき事をも思ふにまかせて過さまほしけれど源氏の後にのこり給はん子孫の事の外にをとろへ給はん世のむくひをさへ思召せば思ふまゝにもえし給はぬよしを紫上にかたり給ふ也。さて紫上也只今の御威勢にまかせて情なき事し給ふなどの誠め也」とあるように、光源氏の子孫の衰えを読むのが主流で、『湖月抄』が、最後に、言外に紫上への戒めを読むのが目立つくらいである。（江戸期の新注には言及が見当たらない。）

また、光源氏の発言の最後は、「思ひはばからるれば」と確定条件文なのだが、その帰結については、あまり言及がないうえ、説が分かっている。現代の注でも、旧『日本古典文学大系』本が、「勢にまかせて心驕りを慎み、他の婦人方と、親愛の情を交わしなされよ。」と紫上への戒めを読むのに対し、『新潮日本古典集成』本が、「勝手なことをするのもつつしまれるのです」（主語光源氏）といっているくらいで、これらは条件文までの解釈は略同じなのに、帰結文に関してはこのように見解が分かれる。他は、『源氏物語注釈』六が、葵上と六条御息所の車争いの「時により心おごり」（「時により」は、『源氏物語大成校異篇』によれば大島本の独自本文。他の青表紙本、河内本、陽明文庫本、保坂本により、本稿では「時による」に訂した。「時により」でも、連用修飾になるだけで、大きな意味の違いは出ない。）

に関連して、光源氏は息子夕霧に結婚に際して「心おごり」への戒めをしたが、「ここでは同じ忠告を紫の上にも重ねて繰り返した。…、(葵上と)同じ轍を踏まないようにと、源氏は細心の注意を払う」(四二八頁)と、言っているのが目立つくらいである。旧注でも、『岷江入楚』・『湖月抄』に、前掲のように、光源氏自身の自重を軸にした言及があり、さらに『湖月抄』に言外に紫上への戒めをみていたくらいである。

このように、光源氏の紫上へのこの発言は、「たとしへなき衰へ」が誰の何をさすのか、「思ひはばかりるれば」の帰結文の内容は何なのか、など、解釈上の問題を抱えている。これはさらに、藤裏葉巻の他の二つの光源氏の人生認識と、どうつながり、第一部の掉尾における、光源氏の精神的到達点をどう把握するか、という、重要な問題を内包する。

以下、このような見通しのもと、この発言の解釈を考えてみる。

二、文脈の解釈

まず、この発言の前景として存在するところの、紫上が「祭の日の暁に詣でたま」うた「みあれ」は、天皇行幸や関白賀茂詣でが行われるようになる、四月中の申の日に行われた、国祭賀茂祭またはそれに先立って行われる御阿礼祭に関わると考えられるが、『紫明抄』や『原中最秘抄』・『河海抄』が、「たいのうへみあれにまうて給」に、「賀茂祭前日於垂跡石上有神事号御形御阿礼者御生也ミタマノ見古語拾遺」(『河

海抄』へ「紫明抄 河海抄」角川書店)と記し、『河海抄』がさらに、「御禊ミアレ祭ノ前ノ一日ヲ御禊日と云也御生所ハ神館ニアリ(云々)祭時ノ御旅所也」とあるように、祭は、上賀茂社と北方の神山との間に設けられた御生所と齋院神館を軸に降臨・遷霊の儀が行われ、『弄花抄』(『源氏物語古注集成8』)が、「たいのうへみあれにまうて給」に注して「御あれの神館へ紫上参給也」というように、紫上は賀茂祭当日中西日の暁にこのあたりに詣でたようである。御阿礼祭は、賀茂神の出現を冀い、それにより神威を更新したもので、「かくて、六条院の御いそぎは廿よ日のほどなりけり。対の上、みあれに詣で給ふとて」(一〇〇七)という行文からすれば、参詣の目的を、皇子誕生を意識して、「紫上の姫君入内のために御社参也。」(『万水一露』)、「明石姫君入内の祈禱に紫上御形に詣給ふ」(『源氏綱目』)「源氏物語古注集成10」)と、明石姫入内との関係で読むのは自然だろう。後世の文書だが、そもそも賀茂社は、王城鎮護の地主神である以前に、「当社は五穀成就万物成就の御神とぞ」(『菟藝泥赴』へ「新修京都叢書十二」)と、言われるように、雷神水神信仰、豊穰の社なのである。こうした明石姫の将来と源氏一族、天皇家の安泰を願う背景的事情のもとで、賀茂「祭の日の暁に詣でたまひて、かへさには、物御覧すべき御棧敷」のあたりに、紫上以下の御方々の女房の牛車が数多く場所を占め、遠目からもその一行とわかる盛大さの中で、光源氏は、かつての御禊の日の車争いを想起して、当事者たちが既に他界している現在、その遺児たちのありように思いが至ったのだと思われる。

そこで、光源氏はこのように思う。「時による心おごりして、すな

わち、権勢を笠に着た傲慢な態度で、御息所の牛車を押し下げたような行為は、思いやりのない情愛のないことだ、格段に相手を無視した当人も、その嘆きを身に負うような状態でなくなつてしまつた、と。そして、まもなく東宮に入内する明石姫君の将来を展望しつつ、車争いの当事者たちの遺した子たちの現状に目を向ける。そこにあつたのは、「時による心おごり」をした葵上の遺児夕霧が宰相の中將にとどまつているのに対して、「こよなく思ひ消」たれた六条御息所の遺児秋好むが中宮となつている姿であつた。この状況を光源氏は「思へば、いとこそあはれなれ」と感じて、「すべていと定めなき世なればこそ」と続けていくのだが、これによれば、光源氏は、車争いの当事者葵上と六条御息所の子たちの現状に、「すべていと定めなき世」、世の無常をみたことになる。

だが、この展開に関しては、世の無常でなく、因果を見る説がある。『一葉抄』は、「なにことも思ふまゝにていける世のかきりの世を」の箇所には、「父祖善悪ハ子孫にむくふ理也、当時の御さかへにつけても行く末のおとろへをおもひの給事也」といい、『内閣文庫本細流抄』も、「宮はならひなき」に、「秋好也中宮に立給てならひなき人也其むくひある歟と也」とし、また、『源氏綱目』も、「むかし六条宮す所と葵上との車あらそひにて葵上はかくれ給ひ夕霧中将はたゞ人也秋好は中宮となり給ふは因果かと紫上に見物の棧敷にて源氏かたり給ふ」と、親と子の栄枯逆転に、因果応報の理をみている。しかし、いわゆる「親の因果が子に報ゆ」的なこの時代の説話のさまを、いま、『日本霊異記』と『今昔物語集』巻九・十九・二十にみても、震旦に

は、狩を好む親の寵愛する女兒が、七歳にて姿をくらし、棘の中で発見されるも、棘の針に刺され、言語発せず鬼の鳴くような声をだし、飲食せずに死んだ話（『今昔物語集』九一二）、鷹狩を好み殺生を常とする男の妻が、鷹の嘴のような口を持った男児を産んだ話（同九一二六）、囚人を酷暴していた獄吏に生まれた子には、頤の下、肩に首枷のような肉が付き、首項なく、年を経ても歩くことなく死んだ話（同九一四一）、など、親の悪業の因果が子に報うような説話が見出されるが、本朝では、この類の話を見出しがたく、せいぜい、人の娘を手に入れようとして人間に変じた鬼が、娘の親に諸の財宝を差し出したところ、それに耽つた親が娘との結婚を許し、端正な娘を鬼に食ひ殺された話（同二一三七）が探せるくらいである。しかも、いずれも子の不幸を親が己の生前に見届ける、つまり、親の現報として子の不幸が起るのである。だから、車争いの当事者たちの遺児における、親との栄枯逆転とは、様相が異なる。

よつてここは、光源氏の発話の流れのように、「すべていと定めなき世」、世の無常を背後にみておくべきなのだろう。当時、「盛者必衰」は一般的仏教通念であつた。

一切世間に生ある物はみな滅す。寿命無量なりといへども、必ず尽くる期あり。盛りあるものは、かならず衰ふ。会ふものは、離別あり。果報として常なる事なし。あるいは昨日栄えて、今日衰へぬ。（『栄花物語』うたがひへ『新編日本古典文学全集』）

雖然モ、生有ル者ハ必ず滅ス、盛ナル者ハ必ず衰フ。

（『今昔物語集』巻三一二五へ『日本古典文学大系』）

しかし、光源氏は、この親子の過去現在の無常の背後に何を見たのか。それは、車争いを引き起こした葵上の「時による心おごり」であったと思われる。だからこそ、この後、「すべていとさだめなき世なればこそ、なに事も思ふままにて、生ける限りの世を過ぐさまほしけれど、(しかし、思ふままに、意に任せて過ぐすという事は、それは結局周囲を顧みない「心おごり」の生活を送るということになり、そのため招来される)残りたまはむ末の世などの、たとしへなき衰へなどをさへ、思ひはばからるれば」、ということに、なるのだろうか。

この「心おごり」のもつ、思いやり・情けと対極の傍若無人の性格は、源氏物語中の他の例からもうかがい知れる。明石女御と薫における例。

(明石女御) 心のうちには、我が身は、げにうけばりていみじかるべきにはあらざりけるを、対の上の御もてなしにみがかれて、人の思へるさまなどもかたほにはあらぬなりけり。人をばまたなきものに思ひ消ち、こよなき心おごりをばしつれ、世の人は、下に言ひいづるやうもありつらむかし、などおぼし知りはてぬ。

(若菜上一〇八八)

この君しもぞ、(匂)宮に劣りきこえたまはず、さまことにかしづきたてられて、かたはなるまで心おごりもし、世を思ひすまして、あてなる心ばへはこよなけれど、故親王の御山住みを見そめ給ひしよりぞ、さびしきところのあはれさはさまことなりけり、と心苦しくおぼされて、なべての世をも思ひめぐらし、深きなきけをもならひ給ひにける。

(宿木一七四九)

光源氏自身もこれまで、青年期に、軒端荻と結婚した蔵人少将が、軒端荻の相手が光源氏であったと知つたら、「さりとも罪許してん、と思ふ御心おごりぞあいなかりける。」(夕顔一四二)と語り手から言われたり、伊勢下向の近づいた六条御息所を野宮に訪問して「あはれとおぼし乱るる」が、「心にまかせて見たてまつりつべく、人も慕ひさまにおぼしたりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしもおぼされざりき。」(賢木三三六)と、人の気持ちを解さない行動をとっていた。これらは青年期の驕りといえるが、それ以後桐壺院の崩御・須磨明石の沈淪、その時期の時流に従う人心の推移の様態をみて、人の世のさまを思い知り、驕りは抑えられ、前齋宮を冷泉帝に入内させる時も、本意のあつた朱雀院に心痛め、絵合の行事の後には、「猶常なきものに世を思して、今少し(冷泉帝が)大人びおはしますとみたてまつりて、猶世をそむきなんと深く思ほすべかめる。昔の例を見聞くにも、齡足らで官位高くのほり、世に抜けぬる人の、長くえ保たぬわざなりけり。この御世には、身のほどおぼえ過ぎにたり。なかごろなきになりて沈みたりしうれへに変はりて、今までもながらふるなり。今より後の榮えは猶命うしろめたし。静かに籠りゐて、後の世のことを勤め、かつは齡をも延べん、とおもほして」(絵合五七四)、出家を視野に入れ、嵯峨野の御堂を建立するなど、我が身を反省するようになっていた。

だが一方、その嵯峨野の御堂建立の件に引き続いて、「末の君達、思ふさまにかしづきいだして見む、とおぼしめすにぞ、とく捨て給はむことはかたげなる。いかにおぼしおきつるにか、といと知りがた

し。」と語られているように、宿曜の予言に結びついた子孫扱いには、梅枝巻の明石姫君の裳着・東宮入内の準備のように、格別の力を傾けた。藤裏葉巻では、夕霧の結婚に関しても、雲居雁の父内大臣が折れて、夕霧を自邸の藤の花の宴に招いたときに、その報告を受けて光源氏は、「思ふやうありてももし給へるにやあらむ。さも進みものし給はばこそは、過ぎにしかたのけうなかりし恨みも解けめ」との給ふ御心おごり、こよなうねたげなり。」（一〇〇〇）と、先方から折れてくるのならば、故大宮への不孝の恨みも解けるだろう、と発言し、語り手からその「心おごり」を批判されている。また、当の夕霧には、結婚の翌朝に、前掲②のごとく、折れて出た岳父に対して「心おごり」して浮気するなど逸脱した行動を取らないよう、教訓している。そして、この③では、かつての車争い回想における「時による心おごり」をした葵上とその対象六条御息所の遺児たちの現状言及となるのであり、藤裏葉巻の基調の一つに、末長い子孫の繁栄を庶幾して、その阻害要因となる「心おごり」を否定する思想があると、いえる。「心おごり」という語は用いられていないが、梅枝巻で、明石姫入内の調度の絵の中に、「かの須磨の日記は、末にも伝へ知らせむとおぼせど、今少し世をおぼし知りなんにとおぼしかへして、まだ取りいで給はず。」（九八九）としたのも、姫君の心おごりを抑制するために、須磨の絵日記を活用する最善の時期を探った判断といえよう。

こうして、光源氏は、明石姫の入内をひかえた状況のなかで、祭の日に、昔日の車争いを想起し、そこから「すべていと定めなき世」、無常の世における子孫の転変・没落の背後に、「時による心おごり」

を見、わが一族にそのようなことが起こる可能性を見通して、「すべていとさだめなき世なればこそ、なに事も思ふままにて、生ける限りの世を過ぐさまほしけれど、（それでは周囲を顧みない「心おごり」の生活を送ることになり、そのため招来される）残りたまはむ末の世などの、たとしへなき衰へなどをさへ、思ひはばからるれば」と発言することになったのだろう。

三、「残りたまはむ末の世などのたとしへなき衰へ」

では、「残りたまはむ末の世」、「たとしへなき衰へ」とは、それぞれ誰のそれを、光源氏は念頭において発話しているのだろうか。

まず、「残り給はむ（末の世など）」の主語は、「敬語があるから紫の上のことである」（玉上琢弥『源氏物語評釈』）のは確かだろう。このあたり、夕霧には敬語を使っていないし、中宮になっている秋好むを光源氏死後の成り行きが問題となる人物として、紫上以上にここで想起する必要性はやはり弱いし、明石姫は、みあれ詣で・賀茂祭見物のこの場に直接は言及が全くないのであるから。そうすると、「末の世」は紫上のそれなのだろうか。

源氏物語中の「末の世」の語を見ると、その人物の晩年や盈虚思想による末世を表したりするが、それと同時にその人物の死後や子孫の時代までも指している例がある。

六条院は、おりゐたまひぬる冷泉院の御嗣ぎおはしまさぬを、飽かず御心の内におぼす。同じ筋なれど、思ひなやましき御事なく

て過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世、口惜しくさうざうしくおぼせど、

(若菜下一一三四)

「笛竹に吹きよる風のことならば末の世ながき音に伝へなむ思ふかたことに侍りき。」と言ふを

(横笛一二七九)

だから、この「残り給はむ末の世など」は「あなたがお残りになる私の死後」ということになるだろう。「世」の類に「など」の続く例は源氏物語にこの例しか拾えない。これは、「残り給はむ末の世など」が、光源氏の没後に紫上が残るといふ不祥の状況を表す語なので、「など」をつけてやわらげた表現と見ておく。

では、「残り給はむ末の世などの」たとしへなき衰へ」はどうか。

「残り給はむ」末の世(など)の(たとしへなき)衰へ」という例は他に見いだせないようなので、類似の表現を見ると、

(八宮の訓戒) うしろやすくつかうまつれ。何事も、もとよりかやすく世に聞こえ有るまじききは人は、末の衰へも常のことにて、まぎれぬべかめり。かかるきはになりぬれば、人は何と思はざらめど、口惜しうてさすらへむ、契りかたじけなく、いとほしきことなむ多かるべき。

(権本一五五八)

(父の死により宮の君が)かくはかなき世の衰へを見るには、水の底に身を沈めても、もどかしからぬわざにこそ、

(蜻蛉一九七六)

若き時にたくはへ渡らひ心ある人につきて、家刀自づき、家の内になきものなくてある人なむ、行く先頼もしき。末の世衰へて果

つる、家貧しき人の聞くぞかし。

(『うつほ物語』祭の使へ『新編日本古典文学全集』)

(教通が生子を)わがなからむ世に、あるよりは衰へ、心細くや思されむと、うしろめたきあまりには、

(『栄花物語』けぶりの後)

なにごとにつけてもはなやかにもていでさせ給へりし殿の、父殿うせ給にしかば、よのなかおとろへなどして、御やまひも重くて、大将も辭し給てしこそ、くちをしかりしか。

(『大鏡』兼通伝へ『日本古典文学大系』)

など、妻が関わり得るのは『うつほ物語』祭の使の例のみで、ほとんど全て、親の死により子の零落する場合である。その『うつほ物語』の例も、妻を除外して見る余地もある。だから、藤裏葉卷③の場合もまずは、光源氏の子孫たちの零落と読むのが、夕霧の結婚(「心おごり」を戒めていた)、車争い当事者の遺児たちの現状、明石姫の東宮入内と続く文脈の中で自然なものだ。多くの古注の説くところである。だが、同時に、③では、妻の紫上を目の前にし、彼女の存在を考慮して「残り給はむ(末の世などの)」「あなたが生き残っておられることになる(私の没後の)」「たとしへなき衰へなど」と、続けたので、子孫のみならず、紫上の将来の不安も合わせられる表現になった。しかも、この条の直前に、物語には、賀茂祭見物のため紫上がおさまった棧敷のあたりのさまを、「御方がたの女房おのおの車引き続き、御前、所しめたるほど、いかめしう、かれはそれと遠目よりおどろおどろしき御いきほひなり。」と紫上の盛大な勢力のさまが語られてい

た。だから、光源氏には、かつての御禊の日の葵上方の「儀式もわざとならぬ様にて出でたま」いながら、「よそほしう引き続きて」（葵二八六）いた美美的様が想起され、目の前の紫上の勢力の盛大さと重なったのは当然であった。そして、葵上の「時による心おごり」が引き起こした車争いは、光源氏の正妻としての「なさけなき」わざであった。これは、そのまま現在の紫上に引き継がれるべき教訓なのである。実際、この教訓を意識したかのような紫上の行動が、これ以後引き続きいて、紫上からの明石姫君東宮入内における実母明石御方の姫君後見役としての引き立て発議、明石御方と明石姫君の母子再会、紫上と明石御方対面による養母実母融和などの、理想的行動として実行され、またさらに、これ以降、前掲『内閣文庫本細流抄』が、「たいのうへみあれに」の条に「此時分紫上の栄花の盛也若菜の巻よりは思ふ事のある也」と想起していたような、若菜上巻以後の女三宮降嫁による紫上の「衰へ」も起こるのである。だから、現代の諸注が、この光源氏の車争いを回顧しての発話をもつばら紫上に関わるものとするのに関しても、それに応じる状況は存在するのである。

しかし、③以後、紫上は「心おごり」を抑制するかのような明石母子との融和的態度もとるし、また、女三宮の降嫁は、「残り給はむ末の世」、光源氏没後のことではない。しかも、③での光源氏の発話に続いて、明石姫君の東宮入内のあと、藤裏葉巻に示される三番目の彼の人生認識である①においては、明石姫君の入内、夕霧の結婚という子孫の安定を見た上での、出家の決意が示され、それにより取り残されることになる紫上や花散里などの妻たちの将来の不安は、光源氏の

子たちや養女による後見を見越すことよって解消されるという副次的な位置づけがされていた。光源氏の意識の中心は子どもたちに置かれているのである。だから、藤裏葉巻における光源氏の人生認識の基調は、自身の死後・あるいは出家後における子孫の安泰・繁栄への腐心なのであり、賀茂祭時の車争いを回想した紫上への発話の中核も、あくまでそれに基づくものなのである。それゆえ、現在の諸注が光源氏死後の紫上の零落にのみ、これを理解しているのは、根本を忘れた偏向というべきものである。

四、「たとしへなき衰へなどをさへ思ひはばからるれば」

さらに本文の展開をみると、このような光源氏没後に彼の一族に由来しうる「たとしへなき衰へなどをさへ」に、「思ひはばからるれば」「など」（御物本・横山本・池田本）と、言葉の続くのが、青表紙本と、大島本を除く河内本である。これに対し、別本の陽明文庫本、保坂本は、「たとしへなきおとろへなとをさへ思はからるれば」（陽明本）、「たとしへなきおとろへもやと思ひはからるれなと、かたらひ給て」（保坂本）と、「思ひはばかる」が「思ひはかる」になっており、この部分、「思ひはばかる」と「思ひはかる」の対立がある。

「思ひはばかる」は、

故宮のおぼさむ所によりてこそ、世間の事も思ひはばかりつれ、今は心やすきさまにても過ぐさまほしくなむ。（薄雲六二二）

さて車にも立ち下り、うち歩みなど人わるかるべきを、わがため

は思ひはばかりず。

(藤裏葉一〇一〇)

と、気兼ねして思案する意味を表す。一方、「思ひはかる」は、名詞の「おもひばかり」が、「平安後期になると、オモンバカリとなり、その撥音便の部分の省記された例も生じる。漢文訓読語系統の語で、女性の和文系統のものには使用されていない。」(『古語大辞典』当該語「語誌」と言われるのと連関して、『竹取物語』や『うつほ物語』など男性の手になるとみられる作品には例が見られるが、女性の和文には基本的に見出しにくい。とすると、陽明本や保坂本の「思ひはかる」は、後の本文の形か、光源氏という男性の使用した語という限定のつくことになるが、女性である聞き手の紫上を意識すれば用いにくい語であろう。十分考える、考えめぐらす、などの意味である。

この翁は、かぐや姫のやもめなるを嘆かしければ、よき人には
せむと思ひはかれど、(『竹取物語』へ『新編日本古典文学全集』)
いづれの人のきざし置ける女人をか、しかはせしむべき。よく思
ひばかりて、しかはせしめむ。(『うつほ物語』藤原の君)

したがって、青表紙本や河内本では、「光源氏死後の一族の零落などまで、そうなってしまうようにと氣遣われるので」、というほどの意味に、また、陽明本や保坂本では、「光源氏死後の一族の零落などまで、そうなってしまうのではないかと思案されるので」、というほどの意味になる。おおまかな思考の傾向はほぼ同じだが、後者の方がより悲観的なとらえ方といえようか。

よって、「たとしへなき衰へなどをさへ、思ひはばかりるれば(陽明本は「思はかるれば」。保坂本は条件句とならない。)」という条

件の帰結文の内容は、前掲の『岷江入楚』が、「扱わが徳をもおごらずして、子孫にのこしたく思ふ故に、心のまゝに、榮耀をばつくさぬよしを、紫上へかたり給ふ」といい、『湖月抄』が、「源氏の後にのこり給はん子孫の事の外にとろへ給はん世のむくひをさへ思召せば思ふまゝにもえし給はぬよしを紫上にかたり給ふ」と言っているごとく、光源氏自身の「心おごり」を抑えた自制の態度と行動をとることの表白だろう。そしてそのうえで、「さて紫上も只今の御威勢にまかせて情なき事し給ふなどの誠め」(『湖月抄』)の意味が付随することになるのだと思われる。

以上のようなことを、光源氏は紫上に親しく「うち語らひたまひて」、上達部などの集まっている棧敷に出ていった。「うち語らふ」は、親しく話し合うこと。

明け暮れのもの思はしき、つれづれをも、うち語らひて慰めなら
ひつるに、
(薄雲六〇六)

まづは今宵などの御もてなしよ。北面だつ方に召し入れて、君達こそめざましくもおぼしめさめ、下仕へなどやうの人々とだにうち語らばばや。
(藤袴九二六)

「…。これのみこそ、げに世を離れんきはほだしなりけれ」と、
うち語らひ給へば、心苦しう見たてまつりたまふ。

(橘姫一五三七)

来年には四十歳になろうとする光源氏は、明石姫君の東宮入内を目前に、子どもたちの将来の安泰を考え、自らの自制を主とした生活態度の表白を紫上に親しく語ったのだが、六条殿の北の方として勢力盛

んなこの時の紫上の今後も、車争いの回想から思惟され、実子もなく、光源氏一人のみの愛情に支えられて現在の人生の頂点に至った彼女の、光源氏亡き後の零落も心配されて、「末の世の衰へ」という、本来は子孫たちの零落を心配する語句の中に、「残り給はむ末の世などの」といつて、紫上の存在を織り込むことで、副次的に、紫上の「心おごり」の抑制をうながすメッセージをそれとなく、彼女に伝えたのである。そのあたりの機微が、「思ひはばからるれば、…」という帰結文の省略と、「…、とうち語らひ給ひて」という「うち語らふ」の使用に籠められているのだと思われる。

五、光源氏における「心おごり」の抑制

では、子孫と紫上の将来の安定のために、自他に「心おごり」の抑制を求めた光源氏は、自身においてはどのような行動をとろうとしたのか。藤裏葉巻をこれ以後見ていくと、①のように、明石姫君の東宮入内の後、光源氏は出家を決意していく。この出家は、前掲のごとく総合巻に、

大臣ぞ、猶常なきものに世をおぼして、（冷泉帝が）今少し大人
びおはしますと見たてまつりて、猶世をそむきなん、と深くおも
ほすべかめる。昔の例を見聞くにも、齡足らで官位高くのほり、
世に抜けぬる人の、長くえ保たぬわざなりけり。この御世には、
身のほどおぼえ過ぎにたり。なかごろなきになりて沈みたりしう
れへに変はりて、今までもながらふるなり。今より後の栄えは猶

命うしろめたし。静かに籠りゐて、後の世のことを勤め、かつは
齢ひをも延べん、とおもほして、山里ののどかなるを占めて、御
堂を造らせ給ひ、仏経のいとなみそへて、せさせたまふめるに、
末の君達、思ふさまにかしづきいだして見む、とおぼしめすにぞ、
とく捨て給はむことはかたげなる。（五七四）

と、あつたことの到着点と言える。冷泉帝も二十一歳となり、政權も
内大臣に譲り、夕霧や明石姫君も落ち着いたと認識したからである。

この出家の決意は後世を願うものだが、同時に、自分が出家すること
は、滅罪とその功德により、後に残る妻子の安寧をもたらすものでも
あるはずだ。ともかく、出家がその「心おごり」を抑制する具体的方
法と考えられたようだ。この出家の意向は、賀茂祭見物の棧敷で、

「たとしへなき衰へなどをさへ、思ひ憚らるれば（…）」と、うち
語らひ給。つた時に、紫上に匂わされていたことなのかもしれない。

しかし、夕霧はまもなく中納言になるものの、この時点ではいまだ
宰相の中將にとどまる十八歳、明石姫君は東宮に入内したばかりで十
一歳（新年立による。旧年立ならば十二歳）、またほかに、紫上以下、
三十代から四十歳ほどの妻妾を複数抱え、彼らを残して光源氏が四十
歳ほどで出家しようとするのは、彼の庇護をいまだ必要とするであろ
う一族の者たちの存在を考えれば、早過ぎはしまいか。にもかかわら
ず、「今は本意も遂げなん、とおぼしなる」のは、光源氏がどこかで
状況に甘え、心おごりをしていると思えないか。そうであるならば、
この背後では、彼を実父と知っている当代冷泉帝の存在、藤裏葉巻で
成就した夕霧の結婚と明石姫東宮入内によって萌した、濡標巻の宿曜

などの子孫繁栄の予言実現の確信が、光源氏に大きく意識されているのではないだろうか。この出家の決意にはどこか心の緩みがあるように思われる。

この疑問とつながるかのように、光源氏は①の出家の決意に続いて、桐壺巻の高麗人による観相の最終的な実現となる「太上天皇にならぶ御位」を、辞退することもなく獲得し、その披露・返礼・祝賀、あるいは冷泉天皇にとっては朝覲行幸の意味もあるのか、天皇と上皇の六条院行幸御幸が行われることになる。つまり、光源氏は出家を決意したと語られながら、いまだ世俗の榮華に執着している。あるいは、おし流されている。そして、これにより、准太上天皇に相応しい配偶が欠けている、という新たな状況もみずから招いた。

藤裏葉巻初で、雲居雁の結婚問題で思い弱って光源氏・夕霧方に折れて出てきた内大臣に関して、「思ふやうありてものし給へるにやあらむ。さも進みものし給はばこそは、過ぎにしかたのけうなかりし恨みも解けぬ」と夕霧に発言して、語り手から「…と、の給ふ御心おごり、こよなうねたげなり。」と批評されていた光源氏の「心おごり」は、その後も藤裏葉巻において、夕霧や紫上など身内への教誡とは裏腹に、まず光源氏自身にその抑制が求められながら、彼の内部で無意識には頭をもたげて、その後の、女三宮の降嫁受け入れへと流れ動いていくようである。若菜上巻以後の末の世の「衰へ」は、光源氏自身のうちに胚胎する。

付記 本稿は、平成十九年度佛教大学教育職員研修の成果の一部である。

〔注〕

〔1〕源氏物語の本文は、『源氏物語大成校異篇』による。ままた諸本により校訂し、仮名遣いを訂し、活用語尾を補った。踊り字は、想定される仮名に直した。漢数字は頁数。

〔2〕「心おごり」を問題とする文脈との関係では、願わしい状態をさす「思ふさま」よりは、意に任せる「思ふまま」の方が意味的に繋がる。山崎良幸他『源氏物語注釈六』四二六頁参照。

〔3〕座田司氏『御阿礼神事』『神道史研究』8-2、昭和三五年。

〔4〕注〔3〕座田論文と、真弓常忠『御阿禮考』『皇学館大学紀要』14、昭和十一年、参照。

〔5〕『源氏物語事典上巻』「みあれ」や旧『日本古典文学大系』本の補注二四六、小山利彦『源氏物語宮廷行事の展開』、鈴木宏昌『源氏物語と平安朝の信仰』は、下社の御生神事（御蔭祭）と紫上のみあれ詣でを結びつけている。紫上が下社にも詣でたことは十分考えられるが、「みあれ山」「みあれ川」「みあれ野」「みあれ壇」（『菟藝泥赴』『山城名勝志』）などの地名が伝わる上社をまずここでは考えるべきだろう。なお、益田勝美『秘儀の島』「久遠の童形神」を参照されたい。

〔6〕光源氏は、政治面においてこのような無常を認識する一方、女性関係においては、「心おごり」と言われてはいないが、玉葛の処遇に関して、「かくまた世馴れぬほどのわづらはしきこそ、心苦しきはありけれ、おのづから、閑守強くとも、もの心知りそめ、いとほしき思ひなくて、わが心も思ひいりなば、しげくともさはらじかし、とおぼし寄」（常夏八三）って、語り手に「いとけしからぬことなりや」と指弾されたり、その延長線上で、玉葛を公人の尚侍として宮仕えさせることの裏事情を実父の内大臣に推測されるなど（藤袴九二三）、「心おごり」に際どく近い目論みを続けていた。結局、これらの目論見は、鬚黒によりつぶされたが。

〔7〕大島本（河内本）は、この部分、「すべていとさためなき世なればこそ、なに事もおもふままにて、いけるかきりのよをすくさまほしければ、のこり給はむするの世なともたとしへなきおとろへなとを、思

はゝかり侍れはとうちかたらひ給て」と、異同が多いが、「思ひはばかる」という語に関しては同じである。また、國冬本も、「すべていとさためなき事なれはこそ、なに事もおもふまゝにてすぐさまほしけれと、のこり給はむすゑの世なともやと、思はゝからるれ、など、うちかたらひきこゑ給て、」と異同が多く、かつ条件形式ではないが、同じく「思ひはばかる」である。

(8) 麥生本、阿里莫本は、このあたり、「すべていとさためなき世なれはこそ、なに事もおもふまゝにていけるかきりのよなれと、たとしへなきおとろへなとをさへ」はゝからるれは」(麥)、「はゝかるれは」(阿)と「うちかたらひて、」となつていて、「思ひはばかる」「思ひはかる」ではなく、また、紫上に関わる「残り給はむ」の句もない。

(うえの たつよし 人文学科)

二〇〇八年十月十一日受理